生徒一人一人の学びを保障する授業改善を目指して

～ 上溝南中学校の校内研究の実践と四年間の歩み ～

相模原市立上溝南中学校　**金子　温**

Ⅰ　はじめに

どの教師にとっても全ての子どもが楽しいと思える良い授業をしたいというのは、未来永劫の願いである。しかし、中学校の教師にとって、進路指導などの事務作業や部活動、生徒指導に追われてなかなか授業準備の時間が持てないのが現状である。そのため自分の授業を改善するための余裕がない。

教師の仕事の本分は、授業力向上であり、子ども達にどのように学力を身につけるかが重要である。しかし私は、今までの経験の中で、そのような校内研究の実践と出会う機会がなかなか得られなかった。

中学校の場合、日々の忙しさからか、校内研究に対しておよび腰である。以前先輩の教師から「中学校で校内研究に力を入れると子どもが崩れ、学校が荒れるんだ。」と聞いたことがある。しかし私たち教師は「学びをあきらめた子は崩れるが、学び続ける子は崩れない。」ことを経験的に知っている。子ども達にとって魅力ある授業をすれば、子どもが問題行動を起こすことも少なくなる。また、今問題となっている不登校生徒も減少すると考える。

本校の以前の状況を見ても「学ぶことをあきらめた子ども」が、授業離脱を繰り返し、私語や立ち歩き、教室から出て行くなどの問題行動を起こしていた。また、問題行動を起こさなくても、教室で机にうつぶせて、学ぶことをあきらめてしまっている子どもが多く見られた。不登校の子どもも多く、各クラスに学校に来られない子どもが複数在籍していた。そこで、そのような課題を克服するために、学習院大学の佐藤学教授が提唱する「学びの共同体」による授業改善を校内研究の柱として平成23年度より行った。

前述したように、中学校での授業改善はなかなか難しい。この四年間の校内研究の歩みと実践についてここに報告したい。

Ⅱ　学びの共同体について

1　学びの共同体とは

学びの共同体というと、教室の机配置がコの字型、4人グループというイメージが強い、しかし佐藤教授は、「学びの共同体の授業改善で大事なことはビジョンと哲学である。」とよく言っている。

「学びの共同体」のビジョンとは

① 生徒一人ひとりの学ぶ権利を保障する。
② 生徒達が学び合い、教師達も学び合い。学びの専門家として成長する。
③ 生徒と親と地域から信頼を獲得し、連帯する。

「学びの共同体」の哲学とは

① 「民主主義」異なった人間同士が共生できる場所となる。
② 「公共性」全ての教師が年1回以上は教室を開き、同僚性を育てる。
③ 「卓越性」どんな条件であっても最上のものを目指す。

これらのビジョンと哲学を実現するために、各学校が実態に合わせて校内研究を進めていくことが求められている。

２　協同学習について

授業の中で求められている学びには、今まで主流だった教師が前に立って黒板を使いながら一方的に知識を教える授業ではなく、子ども自身が仲間と協同的に探求する学習が大事だとされている。

佐藤教授は、学びについて以下のように定義している。

〈学び〉とは、
対象世界との対話（文化的実践）
他者との出会いと対話（対人的実践）
自己との出会いと対話（自己内対話）
の三位一体の活動

三位一体の活動として、対象世界との対話＝教材やモノや事柄と対話を活動する組織、他者との出会いと対話＝個と個の擦り合わせを実現する小グループの活動する組織、自己との出会いと対話＝自分の考えを表現し仲間と共有する活動による「反省的思考」の組織を学びとしてとらえている。

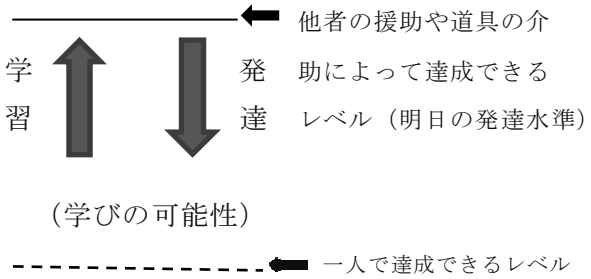
協同学習の授業では、「共有の学び」（教科書レベル）と「ジャンプの学び」（教科書以上のレベル）の２つの課題で協同的学びを組織している。佐藤教授の言うジャンプの学びの課題（以下、ジャンプの課題）とは、クラスの半分から３分の１しかが達成できない教科書レベル以上の課題、難しいレベルの課題である。ジャンプの課題は、できる子にとって有意義であるだけでなく、できない子にとっても有意義である。子どもがジャンプの課題に取り組んでいる様子を見ていると夢中になって学んでいる。たとえジャンプの課題の解決が見られなくても子ども達は、基礎的概念を習得している。佐藤教授はその理由を協同学習の定義を通して次のように述べている。

協同学習について（collaborative　learning）
○学びの活動を対話的コミュニケーション（協同）による文化的・社会的実践として認識し、活動的で協同的で反省的な学びを組織している。
○子どもたち同士や、子どもたちと教師との相互のコミュニケーションを促進し、共通の問題解決を目指してお互いの考えを積極的に出し合うことで新たな創造や発見を行い、話し合いや助け合いを中心とした授業づくり

この考え方は、ヴィゴツキーの発達最近接領域の理論と、デューイの民主主義と対話的コミュニケーションの理論を基礎としている。

ヴィゴツキーの最近接領域は、一人だけで到達する学力は低いが、仲間と学びあうことで達成レベルが上がることを意味している。またその達成したレベルが、その子どもの発達した水準を意味している。

ヴィゴツキーの発達の最近接領域（ZDP）



学びの課題は ZPD の下辺ではなく上辺で設定されなければならない。

そのため、できない子どもにとってもジャンプの課題は有効である。

Ⅲ　上溝南中学校の校内研究の概要

１　研究内容

○授業は、今までの知識を教え込むいわゆる一斉授業から、小グループを使って行う問題解決型授業へ変えていく。
○年４回全員の授業を公開し、外部講師を招

聘し、全員参観、全員協議で授業研究をする。その時は、午前中に全員の授業を見ていただき、午後に焦点授業を行う。
○研究協議は、教師の指導方法に着目するのではなく、子どもの表情や言動に着目して、子どもの表情・しぐさ・会話などをみて、子ども達にとって学びが成立していたかを協議する。研究協議では、全員が１回発言するようにする。
○毎月の学年会の中で授業カウンセリングを実施する。

２　授業での共通確認事項と留意点

授業を行う上での基本として、以下のことを全ての教室・授業で行うことを確認した。

① 基本は、コの字型（男女が市松模様）の机の配置で行う。
② できるだけモノ（資料、写真）を授業の中で使う。
③ 授業の中で２回、グループ、全体で話し合う、学び合う機会を設ける。
１つ目の課題は、共有の課題（全員が取り組めるようなもの）
２つ目の課題は、ジャンプと背伸びの課題（かなり高いレベルのもの）

ジャンプの課題は、今までの「基礎から発展へ学習する展開」から「発展から基礎へ」という今まで教師が考えなかった概念で子ども達に学力をつけさせる。この誰もが興味を持てるジャンプの課題を考えることが教師にとって難しい。その単元について幅広く、そして深い理解がないと子どもが夢中になるジャンプの課題を考えつかない。

ジャンプと背伸びの課題とは
・できそうでできないような課題
・思考が深まるような課題
・クラスの数人、全員が答えられないような課題
・グループ、全体（コの字）での話し合いが深まるような課題

また授業の中での、教師の留意点について以下のことが確認された。

教師が授業を行う上での留意点①
・一人ひとりを学びに参加させる。
・教師がしっとりとした雰囲気の授業を行う。
・声や音をできるだけ外に出さない。
・生徒の発言に対して、教師自らが聴く姿勢をみせる。
・生徒の発言に対してつなぐことを心掛ける。
・グループ活動で話し合いが進んでいないところには、関わる（ケア）

教師の声は大きいことが多い。そこで授業の中で、しっとりとした雰囲気を作るために、意識をして小さな声で話すようにする。また子どもへも、ささやくような声で、授業の中で発言することを求める。今までは授業の中で元気がいい子ども（声が大きな子）が中心に進めていた傾向がある。そこで子ども一人一人の学習を保障するためにしっとりした雰囲気で授業を進められることを求めた。

教師が授業を行う上での留意点②
・できるだけ教師は、声を荒げないで生徒の目線で指導することに心掛ける。
・机にうつぶせる子どもや授業に脱落していく子どもへは、なるべくはやく声を掛ける。
・グループ活動では、なるべく教師への質問は答えないようにし、子どもの中で学び合いが行われるようにしている。

特に机にうつぶせて授業から脱落した子どもへは１分以内に声をかけるようにする。（１分間ルール）これは子どもが一度授業から脱

落してしまうとなかなか授業への参加意欲が二度と戻らないためである。うつぶせてから５分過ぎて声をかけても、すでに気持ちが離れてしまって、その授業に再び意欲を持って参加することは稀である。よって教師は、教室全体を観察し、授業から脱落してしまいそうな子どもに素早く声をかけることを心がける。

３　子どもへのガイダンス

４月のはじめに学び方についての、子どもへのガイダンスを行っている。また学びのルールを学習委員会で作成して、教室に掲示している。

学びのルール

①人の話をしっかりと聴こう。

→目と心で聴くことで大切なことに気づく。

②自分の考えを持とう。

→自分の考えをもち、仲間の考えをきくことで、考えが深まる。

③自分から「教えて」と訊こう。

→訊くことで新しい発見がある。

④訊かれたらわかりやすく教えよう。

→教えることで自分も成長する。

ガイダンスでは、机の配置図や４人グループの作り方なども伝えている。４人グループを作ったときに、休みの人の机を動かすことや机の上にはなるべく物を置かないようにすることなどのきまりを確認している。またガイダンスでは以下のことを授業の中で注意していくように話している。

授業を受ける上での注意点

- 課題が出されたら、学級の仲間やグループのメンバーと一生懸命考え、知恵を出し合う。
- どんなときも、すぐにあきらめない。先生にたずねない。
- わからないときは､｢わからないから教えて｣とグループの仲間に言う。
- 「教えて」と言われたら、一生懸命に教える。
- 誰かが発言するときは､その人の顔を見て一生懸命に聴く｡自分が発言するときは、前に発言した人の言葉につなげて話す。また、クラスの仲間に向けて話す。
- 他の人の発言に対して､素直に耳を傾ける。見下したり笑ったりしない。ひょっとすると､その人の発言の方が鋭い意見なのかもしれない。

４　研究協議について

今までの授業研究では、授業を教室の後ろから見て、教員の指導法について「ここはまずかったのではないか｣などを協議していた。観察者の主眼は教師の言動を中心に見ていた。上溝南中学校の校内研究では、子どもの表情・しぐさ・会話などを中心に見る。子どもの学ぶ姿から、その授業で子ども達にとって学びが成立していたかを協議する。以下のことを確認して行っている。

- 研究協議は、教師の指導方法を中心に話すのではなく、子どもの動きを中心に検討し、授業の改善点を探る。
- 全員が話し合いに参加することで、同僚性が構築される｡(教師の間の仲がよくなり、普段から子どもの情報交換が活発する｡)

研究協議では、１人１回発言することを目的としているが、上溝南中学校の職員の数だと時間がかかりすぎてしまう。そのため東大阪市の金岡中学校で行っていたワークショップ型の協議方法を取り入れた。ワークショップ型のグループ協議では、グループの中で全員が参加することができる。その後、全体で深めるようにしている。このワークショップ型研修では、子どもの言動を時系列ごとに付箋を貼っていく AKE 法を使っている。

AKE 法は、ネームペンと青、赤、黄色の付箋を使う。青の付箋には時刻と生徒の言動で良かったこと、赤の付箋には時刻と生徒の言動で課題があること、黄色には教師の言動と時刻を記入する。その後時系列に付箋を貼っていく。貼った付箋を見て、気付いたことをマジックで模造紙に記す。グループの協議後、全体で授業について協議する。

【良い反応（青色）】

14:15　Ａさん「そうか！わかった！」と、つぶやく

【悪い反応・気になる反応（赤）】

14:30
Ｂさん　机に伏せてしまう

授業分析法（AKE 法）

Ⅳ　上溝南中学校の校内研究の変遷

０　準備年（平成 22 年度）

以前の子供たちの問題行動が多発する状況からは脱してはいたが、不登校生徒が多数いた。また、授業中、机にうつぶせて参加しない生徒も多く、九九やアルファベットが書けない低学力の生徒が授業で置き去りになっている現状があった。そこで、次のような取り組みを行った。

① 夏休みの研修で、学びの共同体のスーパーバイザーである川崎市の元中学校校長馬場先生に講演してもらう。
② 熱海市、富士市、八千代市にある学びの共同体で学校改善に取り組んでいる先進校へ校長を含めて数名が視察する。先進校での具体的な取り組みや成果について情報収集を行う。
③ 視察に行った教師が自分のクラスでコの字型の机配置を取り入れるが、授業が一斉授業のままなので、私語が多くなりやめる。
④ 校長が年度末反省で来年度から「学びの共同体」による校内研究に取り組むことを発表する。しかし多くの教師が抵抗感を示していた。
⑤ 夏の講師の馬場先生には、以降の校内研究会ではスーパーバイザーとして、指導をしてもらう。

１　１年目（平成 23 年度）

どのように校内研究を進めていくか手探りの状態であった。先進校へ視察に行き、実際に授業は見ているが、自分の授業を同じように展開できるか不安であった。ほとんどの教師が、どのような課題を用意すればよいか、授業の中でどのように子ども達と関わっていいか分からない中､次のように進めていった。

① ４月に校内研究グループから具体的に取り組み内容について提案した。
② ４月に子ども向けに授業の受け方のルールなどを示したガイダンス資料を配付した。
③ ４月に第１回のビデオによる校内研究が行われ、研究協議も行った。
④ ５月末までは、コの字型の机配置にせず今まで通りの一斉に前を向いたままにした。（教師の抵抗感を和らげるため、２ヶ月間は、教師の準備期間とした。）この間

に、今までの知識を教え込む授業から、小グループを使った問題解決学習への変換を図った。

⑤ ５／31 に第１回目の授業公開を社会科で行った。

⑥ ６月第２回目授業公開を数学で行った。

⑦ 11 月に第３回授業公開を国語で行った。

⑧ 11 月に研究主任が先進校である東大阪市立金岡中学校へ１週間県外研修で学校視察を行った。

⑨ １月に第４回授業公開を技術で行った。この授業公開での研究協議で金岡中学校が行っていたワークショップ型の研究協議を取り入れた。

⑩ 半数以上の職員が先進校へ視察に行った。

［１年目の成果と課題］

〇多くの教師が、この授業スタイルに慣れてきた。

〇小グループ学習には、比較的うまく取り組めるが、どのようにコの字型で全体交流すればいいか分からないという声が多かった。

〇学校全体が落ち着き、問題行動が減少していった。

〇不登校生徒も減少傾向が見られた。

〇ワークショップ型の研究協議は、子どもの授業での動きがよく見られてよかった。また全員で１つの授業を子どもの姿から語ることの楽しさを知った。

●なかなかうまくいかない教師もいた。特にベテランの先生は今までの授業スタイルになれており、授業の方法を変えることに苦労していた。

●一部の教師からは、グループやコの字型にすると私語が増えるとの評価があった。

●子ども、保護者の中の一部から、学び合いについて反対する声も上がっていた。

２　２年目（平成 24 年度）

２年目は、ベテランの先生が研究授業を行う方針を立てた。授業の方法を変えることがうまくいかない先生は、出来る所から始めてもらった。

具体的な取り組みは次の通りである。

① ５/10 に学習院大学教授の佐藤学氏を招聘して第１回授業公開を国語で行った。

② ６月に第２回授業公開を英語で行った。

③ 11 月に第３回授業公開を理科で行った。

④ ２月に第４回授業公開を美術で行った。

［２年目の成果と課題］

多くの先生が授業の方法にも慣れ、手応えを感じるようになってきた。また５月に佐藤先生からは､「どの学年も学ぶことに夢中になっており、１年間の取り組みとしては、よくやっている。」と評価を受けた。ただジャンプの課題の工夫と子どものへの関わり方(ケア)をもっと丁寧にするべきだと指摘を受けた。

また１年間通してみると、授業のスタイルを変えることがうまくいった先生となかなかうまくいかない先生がみられた。授業によっては、私語や立歩きが目立つところが出てきた。

不登校生徒は、一番多かった時から半減した。

依然学力下位層の生徒が多く。補習などを充実して、基礎基本の定着を図れないかという意見が多かった。

３　３年目（平成 25 年度）

ビデオ研修をやめ、学年ごとに直に授業参観するライブ研修を年４回行った。授業の研究だけでなく、各学級の課題についても学年職員で共有できるように次の取り組みを行った。

① ５月に第１回授業公開を社会で行った。

② ６月に学習院大学教授の佐藤学氏を招聘して第２回授業公開を国語で行った。

③ 11 月に第３回授業公開を音楽で行った。

④ １月に第４回目授業公開を体育と英語で行った。

［３年目の成果と課題］

よくない意味で、教師も子どもも学び合いになれていた。職員全体で、学び合いへの意

識が薄れていた。

学年によって、子どもの私語や立歩きが目立つようになり、生徒指導する場面が増えた。授業の中で、おしゃべり、立歩きをする生徒に授業規律を強く指導し、さらに逃避するよくないスパイラルに入ってしまう場面が見られた。

［スーパーバイザー（馬場）からの指摘］

・授業中先生方が子どもをよく見ていない。課題を出してグループ活動をさせ、そのまま「丸投げしている」場面をあちこちのクラスでみかけた。

・グループに参加できない子どもがいるのにそのまま放置していたり、学び合いが成立していないグループがあっても気にかけていなかったり、課題が終了し、おしゃべりが始まっているグループがあるのにそのままグループ活動を続けている。

４　４年目（平成 26 年度）

昨年度の反省を生かして、まずは形ではなく原点に戻り「学びの共同体」のビジョンや哲学を大事にし、それを実現するために何をするのかを確認した。研究協議の仕方も、子どもの動きだけでなく、教師のふるまい（言動）を観察する人をつくり、子どもの言動だけを報告する協議ではなく、子どもの姿から教師が何を学んだかを話し合えるようにした。

ジャンプの課題の工夫と「つなぐ」ことを今年度の重点課題にし、次のように取り組んでいる。

① ５月に佐藤学氏を招聘して、第１回授業公開を社会で行った。

② ６月に第２回授業公開を理科で行った。

③ 11 月に第３回授業公開を道徳で行う予定。

④ １月に第４回授業公開を理科と国語で行う予定。

［４年目の経過］

授業は、昨年度比べてどの学年も落ち着いて受けられるようになってきた。佐藤先生やスーパーバイザーの馬場先生からも昨年度と比べて、授業の質も良くなっていると講評をもらった。

つなぐ。もどす。とは……

①子どもの意見をつなぐ。

～くんの発言に対してどう思う？、～さんと同じ意見の人もう少し詳しく説明して

②子どもの心をつなぐ。

（グループ活動に参加しない子どもに対して）、わからなかったら、グループの人に聞いてみよう。どこがわかないの？

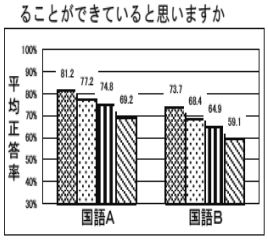
③モノと子どもをつなぐ。もどす。

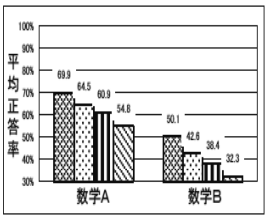
（国語の授業で）～について、どこにそのことが書いてあるの？

Ⅴ　おわりに

お茶の水大学が行った平成 25 年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」に記載された全国学力・学習状況調査のクロス集計によると、「学級のグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを相手にしっかり伝える事が出来ている」と思っている生徒は、そう思わない生徒と比べて、国語Ａで 12.0 点、国語Ｂで 14.6 点、数学Ａで 15.1 点、数学Ｂで 17.8 点も上回っている。また「学級やグループの話し合いなどの活動で、相手

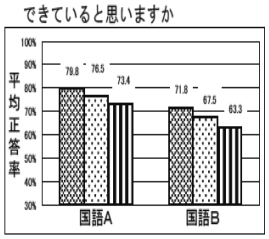
＊第３学年の生徒は，学級やグループでの話合いなどの活動で，自分の考えを相手にしっかりと伝えることができていると思いますか

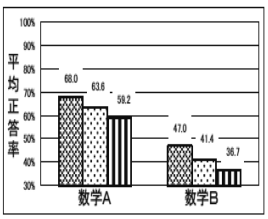




左から順に「①そのとおりだと思う」「②どちらかといえば，そう思う」「③どちらかといえば，そう思わない＋④そう思わない」と回答した学校の平均正答率

＊第 3 学年の生徒は，学級やグループでの話合いなどの活動で，相手の考えを最後まで聞くことができていると思いますか





の考えを最後まで聞くことができる」と思っている生徒は、そうでないと答えている生徒と比べて、国語Ａで 6.4 点、国語Ｂで 8.5 点、数学Ａで 8.8 点、数学Ｂで 10.3 点上回っている。この結果から、グループ活動で自分の考えを伝えたり、相手の話をしっかり聴いたりすることは、学力をつけていく上でも大変有効であることがわかる。しかし中学校では、高校受験をどうしても意識して、すぐにテストの結果に出やすい知識を教え込む形の授業が展開されてしまう。どのように言語活動を中心とした問題解決型の授業にするかが課題である。

上溝南中学校の「学びの共同体」による授業研究も４年目を迎えた。授業を変えていくことは、困難を要する。一番難しいことは、継続することである。そのため仲間と共に悩み励まし合わなければ、なかなか続くものではない。最初に述べたように中学校の授業改革は、部活動や生徒指導などの学習指導以外の面もあり、困難な点が多い。しかし 21 世紀になり、社会は大きく変化してきている。授業もまた大きく変化していかなければならないと思う。子どもの未来のために、私たち教師は学び続けなければならない。今後もこの授業改善を続け、生徒も教師も共に学び合いながら成長できる学校を目指していきたい。

参考文献

① 佐藤学『学校を改革する―「学びの共同体」の構想と実践』岩波ブックレット
② お茶の水大学
平成 25 年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」